



無断転載不可©IPAMIA 2023

IPAMIA Oral History Project

Part5:村田 真 Murata Makoto 1954年10月9日生まれ

インタビュアー 山岡さ希子 (IPAMIA メンバー、アーティスト)

北山聖子 (IPAMIA メンバー、アーティスト)

インタビューをした日 2022年8月20日

場所 村田真氏のアトリエ(横浜市黄金町)

<目次>

1. 大学時代～「びあ」入社まで p.1
2. 「びあ」展、浜田剛爾さんについて p.5
3. 『パフォーマンス・ナウ』の編集、「行為と創造」、「The Next Wave of American Women」 p. 12
4. 檜枝岐パフォーマンスフェスティバル、日本国際パフォーマンス・アート・フェスティバル p.19
5. 美術史、美術シーンにおけるパフォーマンス p.24

1. 大学時代～「びあ」入社まで

山岡: 今日はよろしくお願いします。早速ですが、村田さんは70年代にパフォーマンスのような表現は見ていましたか？

村田: うん、僕は大学時代が73年から77年までで、まさに70年代なんですけど、その頃はまだ「パフォーマンス」って言葉はなかったので、「イヴェント」って呼んでたんですね。へ点の「イベント」は大きな商業的な催しで、「イヴェント」はアート系のパフォーマンスっていうふうに区別してた。50、60年代は「ハプニング」とか「アクション」って呼んでたのが「イヴェント」というようになった。「ハプニング」っていう言葉は、「ハプニング・ショー」ってテレビ番組があったりとか、僕が子供の頃、60年代にはすでによく知られていた。言葉としては有名になりすぎたっていうか、表現としての「ハプニング」だけじゃなくて、色んな場面で使われるようになって、まあ、パフォーマンスもだんだんそうなっちゃうんだけど。

山岡: はい。

村田: 70年代は、どういう作品を作るかに関わらずアーティストたちは「イヴェント」を結構やってましたね。あの派、特に菅木志雄さんがよくやってた。菅さんが、神田の画廊で個展を開くときは、初日にイヴェントをやるのがあって何度か観に行っていたことがある。石ころとか材木とかを並べたり並べ変えたりするっていう、どうって事ないやつなんだけど。10分とか20分くらいのをやって、「ふ～ん」って感じなの。菅木志雄の作品らしいというか、別に起承転結がある訳じゃなくて、なんか「ああ、そうか」っていうようなもの。他には、田窪恭治さんの個展を神田の画廊に観に行った時には、作品が何にもなかったの。接待用のテーブルと椅子があって、テーブルの上にウイスキーの瓶が1本置いてある。グラスがあったかなあ、そのくらいであとは何もない。70年代はそういう訳の分からないのが沢山あった。でも、それにしてもちょっとひどいなと思って。

山岡: ひどいなと思ったんですね。

村田: ひどいなと思った、これはないだろうって。せっかく観に行っただのに、何もないし説明もないし。でもそ

の何年か後に、田窪さんが「ある画廊で《バーボンが1本空くまでのハナシ》っていうタイトルのイベントをやった」という記録を見て、「あ！そのイベントの痕跡だったんだ」と思ったわけ。そのイベントやったのが初日で、その後1週間はイベントの痕跡が残されていた。そういう感じで、70年代のイベントって、つらいというか…あんまり面白いものじゃなかったよね。70年代って「もの派」とか「ミニマルアート」とか「コンセプチュアルアート」とか、表現を抑制させたものばかりだったので、そこから出て来るイベントもそういうものになるよね。

北山: 学生も、イベントを積極的にやってたんですか？

村田: 積極的にはやってなかったかな。僕は絵を描いてたんだけど、3年の時に絵を描くのをやめたんです。当時、「抽象コース」とか「具象コース」が大学にあって、コースなんかに入ってやりたくないんで、学生3人で自主ゼミってのを作って、色々とやってた。その時にイベントとして、箱を作って中に人が入って、穴を開けて手を出せるようにして公園に置いた。僕はそれには参加しなかったんだけど、面白くないなと思って。他の2人はそれやって、公園に来た人と握手したりとか脅かしたりとか、そういうのをイベントとしてやってましたね。だからまあ、イベントには興味があった。

北山: なぜ絵からイベントになったんですか？

村田: 絵を描くよりももっと直接的な表現をしたいって、若い頃って思うわけで、自分が生きて、今ここにいることをそのまま表現として成立させたいという欲求があった。絵じゃ遅いっていうか、絵を描いてる時間と出来上がって見せる時間とはまた別だからね。でも、絵を描くこと自体を見せてもしょうがないなと思って、自分がなにかやってるのを、そのまま表現として成り立たせたいというか……当時、「生の直接性」って言ったのかな？生きることが直接表現になっていくっていうのに憧れて、「絵じゃダメだ」と思って絵をやめて、自主ゼミを作った。それとまた別なんだけど、僕の兄貴が大学で演劇研究会をやっていた。最初はポスターを描いてくれて頼まれたりするつながりだったんだけど、公演観に行くうちに自分もやってみたいなと思って。演劇は自分の身体をそのまま使うから、絵を描くよりも面白いなと思って関わるようになった。

山岡: いつぐらいの時ですか？

村田: 大学の3、4年ぐらいの頃。演劇に役者として立たせてもらってたの。やってる時はもちろん面白いけど、やっぱこれもなんか違うなって思っただけ。すでにあるセリフを覚えて演技するって、それはそれで面白いんだけど、自分の表現ではないなと思ったりもして。まあそうやって、その後の言葉で言えば「パフォーマンス」にどんどん自分が近づいて行ったところがあります。大学の卒業制作の時は、絵を描かないで、自主ゼミの3人でそれぞれが監督になって、映画を1本ずつ撮った。自分が主人公で出てる映画なんだけど、映画の最後は映像が途切れて、スクリーンから僕が出てきて、その場に立って終わりという映画。

山岡: ストーリーもご自分で書かれたんですか？

村田: はい。その当時の自分の問題意識とか、そういうのを書いてね。

山岡: で、最後にご自分が演じている役が現実の人としてスクリーンから出てくるんですね。

村田: そう。なんていうか、美術とか演劇とか映画とかいうジャンルの中でやるんじゃなくて、それを超えていくのが面白いなと思ってた。で、4年の秋、いざ就職という時に「ぴあ」の募集があったんで受けた。僕は美術

も演劇も映画もちよっとやってたから、「ぴあ」には向いてた。その時までは美術の枠がまだなかったんだけど、新しく美術の枠を作るんで担当者を募集してたの。試験も映画、演劇、音楽、美術から2つ選んで、問題に答えろって感じだね。僕は、美術と演劇を選んだのかな？どっちも知ってるから、そこそこいい点が取れて、それで入れた。

山岡:「ぴあ」に入社されたのは、何年ですか？

村田: 77年。

山岡:「ぴあ」って全国版なんですか？

村田: いや、首都圏だけ。

山岡: 最初は月刊で、最後は週刊になりましたよね？

村田: 週刊になった。僕が入った時は、まだ月刊だったの。72年に創刊されて、僕が入った時が5年目。最初の頃は1万部、2万部しか売れてなかったんだけど、ちょうど僕が入る頃が5万部10万部っていう風に急激に伸びてきた時代だった。

山岡: 村田さんが活躍される頃にどんどん部数が伸びたんですね。

村田: そうそう、まさに高度成長期。毎月1万部増、2万部増っていうふうに、編集会議で報告があった。

山岡: 表紙の絵が及川正通さんでしたっけ？

村田: そうそう。

山岡: あの絵はインパクトありますよね、パッと見て分かるから。

村田: 2、3年目からずーっと及川さんだから。

山岡: 美術欄は前例が少ないから、自由に書けたという部分もありますか？

村田: そうそう、そうなの。「ぴあ」で美術のこと知ってる人はいなかったから。「美術手帖」には後ろの方に美術情報いっぱいあったから、それを参考にしながら。自分の好きなようにやれて、すごく良かった。

山岡: 美術の情報誌の先駆けでしたよね。

北山: わたしも全部「ぴあ」で情報を得てました。「すいどーばた美術学院」の前の売店に置いてあって。立ち読みしてた。

山岡: 駄目だよ、ちゃんと買わなきゃ(笑)。

北山: 貧乏だったんで(笑)。浪人生は。

村田: いや、僕もね、学生時代買ったことなかったの。友達に見せてもらって、後ろの方に社員募集ってのがあって、それ見て応募したんだ。社員になったらもらえるから、一度も買ったことない(笑)。

山岡: 回し読みするんですよね。

村田: そうそう、学生はみんな回し読みしてた。

山岡: 「ぴあ」の時は、水を得た魚って感じですか？

村田: まあ、そうね。わりと自由にやってたね。ただ最初の2年間は、展示の情報だけしか載ってなかったの。月刊の時代は、ニュース欄とか記事書くところがなくて、どこの画廊で何月何日から何をやってる、とかそれだけだった。だから情報処理みたいな感じでね。色んな画廊とか美術館に行って、何やるのか聞いて来たりして。それはそれで面白かったんだけど、単なる作業だなんて気はしてた。

山岡: はい。

村田: それが3年目になって、79年に隔週刊になるんですよ。隔週刊になる時にニュース欄が出来て、編集者が書くページが出来たの。それで面白そうな展覧会を取材して文章を書くようになった。その頃、僕は25歳ぐらいだったんで、ちょうど僕と同じ世代が画廊でデビューする頃なんだよね。だから同世代だった川俣正とか保科豊巳とか、岡崎乾二郎とかを、どんどん取り上げていって。それからだね、面白くなってきたのは。

山岡: その時は、ご自身の表現はお休みになってたんですか？

村田: 「ぴあ」入社してからの1、2年くらいは演劇に関わってたかなあ。でも役者では出てなくて、まあ、ほとんどなかったかな。

山岡: そうですか。

2. 「ぴあ」展、浜田剛爾さんについて

村田: それでね、77年に「ぴあ展」っていうのをやったんですよ。12月。「ぴあ創刊5周年記念」だったかな？「ぴあ」をあげてのお祭りをやろうって。練馬にある大泉撮影所を一晚借りて、1泊2日のイベントをやった。映画、演劇、音楽＋α っていう感じで。＋α が美術その他。美術はまだ弱かったから。

山岡: そんなイベントが！



「第一回ぴあ展1977」カタログ表紙

村田: その時は、映画とか演劇とか音楽とかを一晩中演奏したり上映したりした。12月の寒いときで、だれも寝ることを前提にしていなかった。ずーっと、オールナイトだね。

北山: 寝たら寒いですもんね.....

村田: 屋外じゃ絶対寝られないし、室内でも...毛布くらいは用意したけど。それでも思った以上に人が来ちゃってすごい混乱して、結局終電がなくなってからも来る人がいて、シャットアウトしちゃった。

山岡: 若者が大勢来たんですか？

村田: 来たのは、若者ばかり。

山岡: 出演者の選考はしたんですか？

村田: どんな人を呼ぶかって、ずっと会議やってたね。僕、最初は演劇のほうの企画に関わってたんだけど、僕が出す企画があまりにとんでもないんで、別のことをやれて(笑)。屋外イベントとして何か考えろと言われて、そこで今でいう「パフォーマンス」を呼ぼうと考えたんですよ。

山岡: 屋外イベントとしてパフォーマンスを考えた。

村田: そうそう。で、そのとき呼んだのが、田中泯と霜田誠二、花上直人と中城まさお。舞踏系が多いんだけどね。

山岡: 何か記録は残っていますか？

村田: カタログは作ったね。

山岡: この時のパフォーマンスっていうのは美術系の人のパフォーマンスではなくて...

村田: そうですね。菅木志雄さん呼んでも、すぐ終わっちゃうし、つまんないからね(笑)。

北山: その時の霜田さんは、まだ舞踏っぽかったんですか？

村田: そうですね。田中泯も霜田誠二も、全国ツアーをやり始めた頃なんだよ。たぶん77年から。

山岡: 2人とも、～派に入ってる舞踏家ではなくて、独自の舞踏なんですね。

村田: そうそう。1人でやってるし、美術に近いのでその他として扱わせてもらった。田中泯は、わりとその頃

から注目され始めてた。霜田誠二はまだ全然駆け出しみたいだった。

山岡: 村田さんは、ちょっと面白いなと思ったんですか？

村田: そうそう.....あ！ そうだ、僕、美術ともう一つ「イベント」という欄を「ぴあ」で担当してたんですよ。1 ページだけなんだけど。映画、演劇、音楽、美術に入らないものを「イベント」欄で扱ってた。

北山: 名付けようのないものを「イベント」と呼んだんですね。

村田: 霜田誠二は、そこに情報を入れてたから、知ってたんじゃないかな。「ぴあ展」の時は、霜田は2日間ずっと会場にいたんですよ。田中泯は最後の日に来て、30分くらい踊った。田中泯はツアーをやってて、その時の1つの会場として「ぴあ展」が組み込まれてたって感じ。

山岡: すでに売れかかっていた人と、駆け出しの人っていう違いがあったんですね。

村田: 田中泯が踊ってる時に、霜田ともう1人の仲間...誰だったか覚えてないけど、田中泯の踊りをじっと間近でジロジロ見てた。みんな遠巻きに見てるんだけど、霜田ともう1人だけがすぐ近くに寄って、タバコ吸いながらずっと見てる。その時に田中泯のマネージャーだった木幡さん(木幡和枝、アートプロデューサー)に、「あなたたち、失礼よ。どきなさい！」って怒られてた(笑)。あきらかに田中泯のほうが格上だった。

山岡: 面白い話ですね。

村田: それが77年で、その次の年くらいから浜田剛爾という人が、毎年「パフォーマンス・ショー」をやるようになって。



「Summer Performance 1979」チラシ
浜田剛爾企画

山岡: 東京で、ですか？

村田: そう、なんかあちこちでやってた。年に2、3回やってたかなあ。

山岡: どんな場所を使うんですか？

村田: えっとね、よく覚えてないけど、芝増上寺の「地下ホール」とか、「神奈川県民ギャラリー」とか、赤坂の「ドイツ文化センター」かな。浜田さんが初めて日本でパフォーマンスって言葉を使った。「ぴあ展」の頃はまだパフォーマンスって言葉はなかった。

山岡: じゃあ、78年あたりで？

村田: そうだね、僕が浜田さんを知ったのは78年だね。

北山: 「パフォーマンス・ショー」っていう名前の企画なんですか？

村田: みんな、「パフォーマンス・ショー」とか「サマーパフォーマンス」とか「パフォーマンスシリーズ」とかって、テキトーに呼んでたような気がする。正式名称って何だったんだろうね。

山岡: 浜田さんって留学してるんですか？

村田: 留学というか、ドイツとか中東とか、いろんなところを放浪してた。

北山: 海外で「パフォーマンス」という言葉が使われていたから、日本でも使おうよ、ということだったんでしょうか？

村田: そうでしょうね、「パフォーマンス」という言葉を持ち込んだといったほうが良いね。彼が選んで来るアーティストも国際的だったし、アクションやハプニングの系譜を受け継いだ人たちが多かったんですよ。それがすごく面白かった。

山岡: 西洋的な文脈のパフォーマンスだったということですか？

村田: 小杉武久とか鈴木昭男とか、この2人は音楽系だけど、ステラークっていう日本に住んでるオーストラリア人のアーティストとか.....

山岡: 全員、浜田さんが集めたんですか？

村田: そうそう、10人ぐらいを集めて、1か所でやってもらうっていうのが「パフォーマンス・ショー」だったんだよね。

山岡: 費用はどうされたんですか？

村田: どうしてたんだろう。ほとんどギャラはなかったと思うし。日本に在住している人だけで、わざわざ海外からは呼んではないね。ステラークも小杉さんも日本にいたしね。田中泯もよく出た。

山岡: そうですか。浜田さんのイベントはけっこう観に行かれたんですか？

村田: 毎回観に行ってて、その頃から僕は浜田さんの家に入りびたるようになった。その頃、浜田さんは麴町に住んでたの。浜田さんの奥さんが島田璃里(リリ)っていうピアニストだったのね。サティばかり弾いた人で。

山岡: 村田さんはじゃあ、璃里さんにもお会いになったことがあるんですか？

村田: うん、毎回家にお邪魔して璃里さんがお料理作ってくれた。浜田さんのアシスタントをやってたパフォーマンス・アーティストも4、5人いて、僕と同世代だったから、仲良くなった。

北山: その「パフォーマンス・ショー」は、78年から何年くらいまでやってたんですか？

村田: えーっとね、80年代に入って「パフォーマンス」って言葉がどんどん知られるようになって、85年に「パフォーマンス」が流行語大賞の銀賞を取ってる。金賞じゃないの(笑)。で、ここまでいっちゃうと「パフォーマンス」って言葉が使えないっていうか、下手に使うと怪しまれるっていうか。

北山: 政治家の活動に対しても「～のパフォーマンス」というように使われて、アートとしての言葉じゃなくなっちゃった。

村田: そうそう。だから84年頃までだと思う。86年には、かなりパフォーマンスっていう言葉が浸透してたからね。

山岡: 浜田さんとのエピソードとかありますか？

村田: 浜田さんは、とにかく話が面白くてね。70年代に世界中を回ってて、ヨーゼフ・ボイスに会った話とか、どっかで殺されそうになったって話もしてた(笑)。家には、小杉武久さんが時々来てたな。当時、小杉さんも海外によく行ってて、帰って来ると浜田さんのところに行ってたのかな。

山岡: みんなで飲んで話してる感じですか？

村田: そうそう、飲んで話してる。

山岡: 奥さんはピアニストで芸術家ってことは、主婦みたいにかいがいいくしているんじゃないくて、一緒に話している感じですか？

村田: 主婦って感じではなかった。すごいお嬢さまで、麹町の家は彼女の家なの。だから浜田さんはマスオさんっていうか、そういう立場なの。

山岡: そうだったんですね。

村田: 浜田さんのやってたパフォーマンスは毎回、安齊重男さんも撮りに来てた。(※写真家、国立新美術館に撮影した写真のアーカイブがある。<https://www.nact.jp/anzai/index.php>)

山岡: 安齊さんは頼まれた訳じゃなくて、興味があって来てたんですか？

村田: うん。80年代は、僕は安齊さんと行く先々で顔を合わせてたね。

山岡: わたしが観た浜田剛爾さんって、90年代終わりの方だったのかな。ワイングラスをいっぱい積み重ねて、ハチミツを上から流すとか。広めのスペースにインスタレーション的に物を置いて、それに身体が介在する。ロジカルで、深くは理解出来ないっていうか。浜田さんは論理的っていうか、難しい話をする方ですよね。

村田: そうだね、難しいことを難しく話してる、ってところがあつた。でもすごい話は面白くて、論理立ってる。

山岡: はい。

村田: ただパフォーマンスは、論理的というよりも、情念というか..... 後のほうのパフォーマンスになると、自分の血や先祖をさかのぼっていく、というようなことをやってた。彼は津軽出身で、先祖は漁師だったとか、さらに前の先祖は北海道の蝦夷にいたんじゃないかって、どんどん北の方に先祖を求めて行くような感じでね。

山岡: 青森の名家の子ですか? 若い頃にあちこち旅行してたというのは、現実的な話、どういった資金で行ってたんでしょうか?

村田: 網元だったという話も聞いたことある。でも東京に出てきてからは関係ないから、自分で稼いでた。

山岡: バイトして、バックパッカーしながら世界を見たということでしょうか。大学での専攻は絵画ですか?

村田: 芸大の彫刻だったかな。

山岡: 動機としては、世界を知りたいってことだったんでしょうか? そこに行って作品の発表をするのではなくて、世界を見てくるみたいな。

村田: そうだね、彼は団塊の世代よりちょっと前だけど、60年代の終わりの学生闘争の時代の人だから。北川フラムさんと一緒に石投げてたらしい。新宿騒乱の頃で、石投げて電車止めたりね。

山岡: そういう活動をされてたんですね。90年代にお話聞いたりした時は、落ち着いた方という印象でしたけれど。

村田: 結構過激な人ですね。卒業してからインド行ったりとか。中東やヨーロッパの話も聞いたしね。その辺りの地域をずーっと旅してたんじゃないかな。

山岡: その旅の経験は、浜田さんの作品に反映してると思いますか?

村田: いちいち反映はしてないかもしれないけど、放浪がなければああいうのは出来なかったかもなとは思うよ。やっぱり彼のパフォーマンスはすごいなって、思うんですよね。なんと言えいいのか、言葉では割り切れないし、菅さんみたいに石を置いてくだけじゃないし。すごく染みて来るようなものがある。それはそれまでの経験があるからだと思うし。

山岡: 78年くらいから「パフォーマンス・ショー」ですから、その前は旅してる途中だったんでしょうか?

村田: そうですね、戻って来てやったんだろうね。

山岡: 前から知り合いだったんですか?

村田: この時は、知らなかった。知ってたら「ぴあ展」に呼んでたはずだよ。

山岡: 浜田さんのやっていたことについて、レポートとか整理されたことってあるんですか?

村田: ないんだよね、あんまり。

山岡: 惜しいですね。浜田さんのことを知りたいです。85年に出たパフォーマンスを特集した「肉体言語」って雑誌を持ってるんですけど、そこに浜田さんが文章を書いているんですよ。でも、あんまり自分のことを言わないですね。

村田: 自分の具体的な活動については、あんまり残してないね。自分の考えは書いてたけど、実際にいつどこで何をやったかっていうのは、全然分らない。本当に記録がないんです。もったいない。

北山: パフォーマンスのビデオ記録も残ってないんですか？

村田: 写真やビデオはいろんな人が撮ってたはずなんだけど、どうなってんのか全然わかんない。

山岡: わたしたちにとっては、かなり必要な情報だと思っています。探したいですね。

3. 『パフォーマンス・ナウ』の編集、「行為と創造」、「The Next Wave of American Women」 p. 11

山岡: 話は変わりますが、80年代始めの他のパフォーマンスシーンって、どうだったんでしょうか？

村田: その頃から「パフォーマンス」という言葉が出て来たんで、みんなやりはじめた。70年代は、やってたといっても限られてた人だけだったからね。アーティストの数自体も少なかったんですよ。80年代になると、アート自体が盛んになってきてね。「ニュー・ペインティング」とか「ニュー・ウェイブ」とか。

山岡: 「アート」という呼び方もそうですね。

村田: 「アート」とって呼び方をしはじめたのが80年代ですから。70年代はまだ「美術」だしね。

山岡: なんでパフォーマンスをする人は増えたと思いますか？

村田: みんながやってるから。個展やると、初日にパフォーマンスをやるってのが、わりと普通になってたの。でも展示との必然性はあまり感じなかった。

山岡: 「展覧会のオープニングにパフォーマンスやるとか、変でしょ」って村田さんが書いてましたね。「どういふ関係があるんだ？」って。

村田: そうなんです。取って付けたような感じがあって。人集めみたいだしね。あと、その頃から海外の情報が入りはじめて、美術手帳でも「海外のニュー・ウェイブ」、「ニュー・ペインティング特集」をやってて、絵画がすごく流行った。海外の新表現主義の情報が入って来た影響があったんだと思います。同時に、「パフォーマンス」も入って来て、それでみんなやり始めた。

北山: そういう流れがあったんですね。

村田: 絵画の方は図版で見れば、だいたい真似は出来るんだけど、パフォーマンスは真似出来ないんですよ。まだビデオとかあんまりなかった時代で、写真1枚だけ見ても分かんない。だから当時の若いアーティストがやってたパフォーマンスって、なんか色々体に塗ってた動かないでじっとしていると。写真そ

のままで、動きがないっていうか(笑)。

北山: それは面白いですね(笑)。

村田: そういう笑い話みたいなのはありましたね。なんでやるのか? なにを表現してるのか? ってことはすつとばして、とにかくやろうって感じの雰囲気だった。

山岡: 版画なら版画の機械が必要だし、映画だったらカメラとか機材が必要だけど、パフォーマンスはそういう設備がいらないから、とりあえずやってみようってことは出来ますよね。

村田: そうそう。

山岡: 演劇、舞踏、ダンスの人たちも、この頃パフォーマンスをはじめてますよね。檜枝岐だと美術系の人、舞踏系の人がいる感じですけど。(『パフォーマンス・ナウ』を指して)ここに出ている人たちは美術よりも演劇の方が多様な感じかもしれませんが、どうでしょうか?

村田: この本はかなり広げちゃってるからね。坂本龍一とかも入って来てるし、これもあれもパフォーマンスみたいな感じになってきてるよね。

山岡: 村田さんがロンドンに行って帰って来たら、このお仕事が用意されていたということですか?

村田: うん。「ぴあ」を84年に辞めて。で、1年くらい向こうに行って、戻って来たらこの仕事かな。



『パフォーマンス・ナウ』1986年
編集スタッフ：村田真

山岡: この本のディレクションっていうのは?

村田: これは鶴本正三さんと南條史生さん。鶴本さんが企画した。当時、鶴本さんがけっこう海外からパフォーマンスアーティストを呼んで公演をやってたから、それでこういう本を出そうということになったの。

山岡: 鶴本さんはプロモーターですか?

村田: うん、そう。イベントプロモーターで、ツルモトルームというのを主宰していた。

山岡: 南條さんは、この時国際交流基金で働いてたんでしたっけ?

村田: そう、辞める頃かな? 鶴本さんと南條さんがどこかの会議で一緒になって、それでこういうのをやりましょうってことになったらしい。

山岡: なるほど。

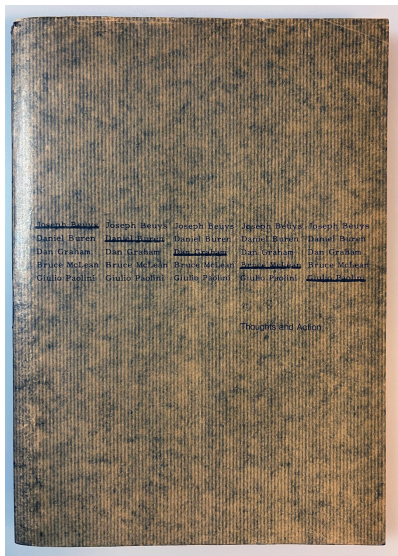
村田: あ、そうだ！その前に、南條さんは「行為と創造」(82年)をやったんだ、国際交流基金で。そうだ、これ重要なやつ。

北山: スペースは、どちらですか？

村田: 「ラフォーレミュージアム(原宿)」で。それで鶴本さんにつながったのかもしれない。

山岡: 「行為と創造」っていうのは国際交流基金の企画ですか？

村田: そう。呼んだアーティストが、ブルース・マクレーン、ダン・グレアム、ジュリオ・パオリニとダニエル・ビュラン。あともう1人ヨーゼフ・ボイスを呼ぼうとしてたんだけど、結局ボイスは来なくて。パオリニも実際には来なかったんだけど、一応パフォーマンスとして展示をやった。この「行為と創造」は、日本の若い人たちに對して影響があったかもしれない。



「行為と創造」展カタログ 1982年

山岡: そんな展示があったんですね。

村田: ボイスは、翌年も国際交流基金が呼ぶんですよ。でもそれにも応じなくて、さらにその翌年の84年に西武が呼んだ。国際交流基金は呼べなかった。ギャラリー・ワタリ(現在のワタリウム美術館)の和多利さんも82年から呼んでたの。交流基金と競合してたんですよ。うちが呼ぶ、いやうちが呼ぶって言って。でも結局、ワタリでも呼べなくて。

山岡: なぜ西武の方には来たと思いますか？

村田: いろんな説があるんだけど、「7000本の櫛の木」のプロジェクトに寄付をした。あれはボイスが1番力を入れてたプロジェクトだから、それに対して西武資本が出した。

山岡: そうか！そういうプロジェクトにだったら、西武は出せたということですか。

村田: 建前的にも、それはOKだった。環境運動っていうことだからね。

山岡: なるほど。

村田: ついでに言うと、84年にボイスが来た時にナムジュン・パイクも来て、2人で「草月ホール」でパフォーマンスをやった。その後だったか、前だったかに鶴本さんがローリー・アンダーソンを呼んで。84年はパフォーマンスが盛り上がった。で、85年の流行語大賞銀賞につながるんだよ、きっと。

山岡: 美術の動向が社会にそんなに影響があるって、今は信じられないですね。

村田: まあ、この時はそういうのあったね。83、4年くらいは、雑誌でも現代美術特集をけっこうやってたから。「朝日ジャーナル」の表紙に現代美術が載ったり、現代美術が盛り上がった。盛り上がったんだけど、マーケットは全然回ってない。情報として面白いねって感じで取り上げられてた。

山岡：村田さんは忙しいというか、面白くてしょうがないって感じでしたか？

村田：そうですね。しかも87年からバブルが始まるわけ。80年代は僕の黄金時代(笑)。

山岡：美術の文章を書く人は美術批評家っていう名前の人が多いけど、そこを美術ジャーナリストって名乗られたのが、すごい印象深いですよね。いつからそう名乗られてたんですか？

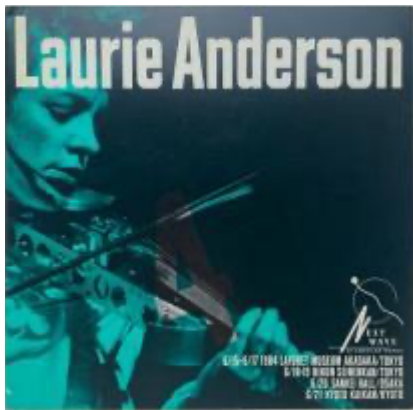
村田：ロンドンから戻って来たときからかな。最初はエディター、ライターって名乗ってた。その時はなんでもできるやろうと決めて、展覧会のコーディネーションもけっこうやってた。美術評論家っていうと絞られちゃうし怖そうだから、それだけはやめようと思って(笑)。名乗っても差し障りないかなって思ったのが、美術ジャーナリスト。

山岡：他にはそう名乗ってる方はいなかったんですか？

村田：当時はいなかったですね。それでなんだっけ？「行為と創造」があって、ボイスが来れなくて...

北山：「行為と創造」では、パフォーマンスもあったんですか？

村田：うん。パフォーマンスもやった。ビュランもマクレーンもダン・グレアムも「ラフォーレミュージアム」でやった。パオリーニはやってないけど。それで鶴本正三が関わってくるわけ。ツルモトルームの関係でいうと、84年に4人の女性アーティストを呼んだの。リサ・ライオン、モリサ・フェンレイ、シンディ・シャーマン、それにローリー・アンダーソンという4人のアメリカの女性アーティスト。最後がローリー・アンダーソンだったの。



山岡：それは鶴本さんの企画だったんですか？

村田：そう、ツルモトルーム。「ラフォーレ原宿」で、パフォーマンスと展示をやった。

山岡：やっぱり、アートと音楽というか、境界がないような形ですね。

村田：鶴本さんはわりとコマーシャルベースの人だから。アートに対してあまり厳密ではなかった。だから、なにがパフォーマンスで、なにが違うという区別はあんまりしてない。

「The next wave of American Women」 1984年
ローリー・アンダーソンのカタログ

山岡：その企画は84年ですか？

村田：84年。小さいカタログみたいのを作って、僕もコラムを書かせてもらったの。それぞれのアーティストに関するエッセイみたいなもの。それが『パフォーマンス・ナウ』の編集をやることに繋がっていったと思う。

山岡：そのイベントってタイトルとか分かりますか？

村田：「Next Wave Of American Women」だったかな。その企画が84年で、ぼくがロンドン行って帰って来て、ローリー・アンダーソンがまた86年に来日するっていうんで、それに合わせて『パフォーマンス・ナウ』を編集したの。

山岡：だから、ローリー・アンダーソンが表紙なんですね。

村田：ローリー・アンダーソンが主役という感じ。だから霜田誠二は出てないでしょ。

山岡：檜枝岐（「パフォーマンス・フェスティバル・イン・檜枝岐」通称、檜枝岐）についても、記事が少なかったです。編集のお仕事したことないのわからないのですが、大変なお仕事ですよね？

村田：大変でしたね。85年の夏に戻って来て、86年の4月発行か。1年弱かかりましたね。

山岡：方向性は鶴本さんと南條さんが決めて、まとめる作業担当だったんですか？

村田：そう、まとめ。まとめで何ヶ月もかかっているから。

山岡：それは村田さんをチーフとしたチームがいるんですか？

村田：チームというか、僕の下にもう1人アシスタントがいただけ。

山岡：誤植とか校正とか、そういうのを直すのもすごく大変ですよ。

村田：大変だった。けっこうまだ誤植とかたくさんあるんだよ。だから、見たくない、あんまり(笑)。

山岡：あはは。

村田：あっごめん、もう1個、大切な忘れてた。82年にローズリー・ゴールドバーグの『パフォーマンス』って本が出た。

山岡：それも、当時影響があったんじゃないですか？

村田：そう。パフォーマンスがブームになった頃。

山岡：その頃はどのようにして舞踏もパフォーマンスって言われていたんでしょうか？

村田：んー、パフォーマンスって広い意味だから、広く解釈すればなんでもパフォーマンスになっちゃうし。舞踏そのものがもともと外れたジャンルだったから、モダンダンスではないし、演劇でもないし、ってところでパフォーマンスに入れられちゃったのかもしれない。

山岡：この村田さんが編集した『パフォーマンス・ナウ』の中の座談会（「座談会 | ハプニングの肉体から、多様化する身体へ」）には、浜田剛爾さんと大須賀勇さんと木幡和枝さんと粉川哲夫さんが出てますね。大須賀さんは舞踏の方ですよ。このメンバーは、鶴本さんか南條さんがお決めになったんですか？

村田：鶴本さんでしょうね。たぶんその当時、大須賀さんがちょっと目立ってたんじゃない。

山岡：粉川さんとパフォーマンスの関わりはどうだったんでしょうか？

村田：粉川さん自身もパフォーマンスやってたし、パフォーマンス論を書いてたかな。けっこうストリート系のことを書いてたから、そのつながりで出てるんじゃないかと思う。

山岡：粉川さんは、檜枝岐にも行ってらっしゃる？

村田：うん、そうだよね。檜枝岐にも行ってる。

山岡：荒井真一さんに聞いたのですが、その頃、霜田さんたちは「公民館運動」っていうのをやっていたそうです。ご存知ですか？

村田：「公民館運動」？知らない。

山岡：公民権運動のもじりだと思うんですけど。公民館を借りて、パフォーマンスをやったそうです。そのようなアーティストオーガナイズの小さいイベントで記憶に残ってるものはありますか？

村田：んー、そうねー。霜田誠二がらみではいくつか見たかな。シンポジウムとか。

山岡：霜田さんが企画したイベントとか？

村田：うん。参加したことあるね。1回だけ、霜田誠二とパフォーマンスやったことある。

山岡：えっ？

村田：やったっていうか、参加した。霜田誠二がうごめいている時に、上から映像を映し出すっていう、コラボレーションみたいなのを。ロンドンから帰って来て、間もない頃だから、86年くらいかな。

山岡：それを頼まれたっていうのは、友だちだったからですか？

村田：まあ、そう。友情出演(笑)。

北山：映像には何が映ってたんですか？

村田：そこにはね、絵。ポロックの絵とか、外国に行ってた時に写真に撮ったいろんな絵とか美術品とかを映してた。映像じゃない、スライドですね。

山岡：カチャカチャって。それで下で霜田さんが。

村田：そうそう。そういうやつ。

山岡：そんな企画もあったんですね。

4. 「パフォーマンス・フェスティバル・イン・檜枝岐」、「日本国際パフォーマンス・アート・フェスティバル」



「HINOEMATA FESTIVAL '89」チラシ

北山：檜枝岐に行った時にどんな印象で見てたか、お聞きしたいです。どんなパフォーマンスがおもしろくて、どんな議論をしたとか。議論を宵っぱりでやってたという記録がありますよね。

村田：議論好きな奴らばかり集まってたっていう印象でね。夜になると、さあやるぞって感じで、酒を前にしてガーガー言ってる。とにかく、相手を論破するのが目的みたいな。枝葉末節というか、どうでもいい話を難しい言葉を使って延々としているような感じがして、なんかあんまり好きじゃなかったな。

山岡：あっちこっちに黒板があって、「自分はここでパフォーマンスやるんだ」って書いてたと聞きました。

村田：あー、そうだね。そういえば。

山岡：どう思いましたか、イベントとして？

村田：すごいルーズだなくて、議論も含めて。議論が始まる直前になって、誰かが「ちょっと温泉行ってくるわ」って、温泉行っちゃって30分くらい帰ってこないとか。

山岡：議論に参加したくなかったのかしら？

村田：いや、みんなすごい言いたがる人だから、議論好きな人ばかりなの。スケジュールとかどうでもいいって思ってたんじゃない。まあ、一晩あるからって思ってたのかもしれないし。ルーズだし、観客のことなんにも考えてねえなって。

山岡：じゃあ、村田さんはいい方法だとは思わなかったってことですか？

村田：うん。自分たちがやりたいことやって、話したいことを話すっていう、そういう内輪のイベントだと思って。山奥だから行くのが本当に大変で、半日がかりでバスで行った。

山岡：2004年に及川廣信さんへのインタビューで檜枝岐のことを聞いたことがありまして、バス乗り場にすごい人が集まっちゃって大変だったって仰ってた。その後、荒井真一さんに聞いたら、「参加したのは選ばれた人だけなんだよ。だから僕は行かなかった。」って言って。だから、そのバス停に集まった人は、やる人じゃなくて見たい人だったんだって。100人パフォーマンスしたい人がいて、100人があっちこっちでやってたのかなって、初めは思っていました。

村田：それは違うね。

山岡：及川さんの企画ですよ。及川さんって舞踏っていうか、白塗りして踊りをする人ですよ。

村田：あんまり及川さんのことは知らないな。

山岡：アーティストが、地元の人と組んでイベントやることは良いけど、じゃあお客にどうやって見せてるのがあってところが問題だったかもしれないですね。

村田：うん。

山岡：浜田さんは「パフォーマンス・ショー」で、お客さんにちゃんと見せる企画の仕方をしてたんでしょうか？

村田：うん。ちゃんと観せてはいたね。でも当時は「なんかわかりにくいな」って思ってた。同時多発にはやってなかったけど、たくさんアーティストがいて、どういう風に見ていけばいいのかとか。特にそういうアナウンスがあるわけでもないし、そういう形式の表現の現場を初めて見たんでね。

山岡：その時代は、区切られた場所以外に、屋外とかアーティストが自分で場所を探してやるような表現は他にもあったんですか？サイトスペシフィックな表現というか。

村田：檜枝岐以外には、どうだろう？

山岡：わたしも、今まで聞いてないです。西島さんは浜や山、森でやりますが、でもそれはお客さんを呼んでやるイベントじゃないですもんね。浜辺で一日中とかそういうのは、自分がやりたくてやってる感じですよ。

村田：当時はパフォーマンスに限らず、野外美術展でも公園とか海岸とか、なるべく人のいないところを選んでやってましたね。人に見せるためより、自分のためにやってるような。

山岡：政治的なメッセージという点ではどうだったのでしょうか。

村田：明確なメッセージを持ってやるっていうのは、あんまり無かったと思う。むしろ、そういうメッセージ性の無いものをパフォーマンスって呼んでたような感じだった。プロパガンダじゃないし、アートの表現としては、ナンセンスなパフォーマンスが多かったかな。

北山：80年代のパフォーマンスのイベントの中で、人がたくさん集まって業界的にパフォーマンスへの関心が高まったのはどんなイベントですか？

村田：ボイスとか、ナムジュン・パイクとかローリー・アンダーソンとか。

北山：名前が有名な人たちが来た時ですか？

村田：うん。

山岡：日本人では？

村田：日本人？いたっけな。

山岡：当時、田中泯が知られてるっていても...

村田：うん。ごく限られた人の中でだね。

山岡：流行語大賞銀賞を取ったわりには、アートの方ではそんなに...

村田：そうだね。アートの方でパフォーマンスのスターみたいな人は1人もいなかったね。

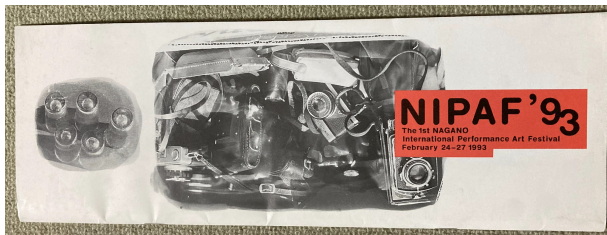
北山：これだけ知られるようになったら、日本人でそういう人が出てきても不思議じゃないですもんね。

山岡：でも、出なかったってことですね。人気も出なかった。演劇では鴻上尚史さんの演劇が、少しパフォーマンス的なものを吸収した感じなのかな。

北山：ジャンルを超えて影響しあったかどうかというのはどうなのでしょう？

村田：ローリー・アンダーソンは、音楽のジャンルに入れちゃうからね。別にパフォーマンスといわなくても入れるジャンルがあるわけで。そう考えるとパフォーマンスのスターっていうのは果たしているんだろうか。

山岡：そういうことですね。ただ一方で、それでもこつこつとやってる人はいて。93年に霜田さんが NIPAF(日本国際パフォーマンス・アート・フェスティバル Nippon International Performance Art Festival の通称、ニパフと表記することもある)を始めたあたりとか、ご存知ですか？



「NIPAF'93」カタログ

村田：最初の頃、わりと行ってたかな。後の方は、あまり行ってないけど。

山岡：応援してたんですか？

村田：まあ、そうだね。その前の92年に NICAF(日本国際コンテンポラリーアートフェア、通称 NICAF、ニカフ)が始まったんだよね。NICAF はすごいでかいアートフェアで、それに対して NIPAF って自嘲気味だな、って感じた。

山岡：自嘲的に聞こえた？

村田：うん。でもね、バブル崩壊後だったから、NICAF の方がどんどん力を失っていった。横浜でやってたのに東京に行って、毎年やってたのが2年に一度になってというふうには、見る影もなくなってね。その反面、NIPAF がけっこう頑張ってたから、逆転したなって思ってた。資金の面では桁違いだけど、元気、威勢の良さということでは NIPAF の方が威勢がいいなと思ったかな。

山岡：NIPAF は95年と96年に「国際交流フォーラム」でやって、97年に「東京芸術劇場小ホール」でやりましたね。でも98年になったら、少し小さい「キッド・アイラック・アート・ホール」になった。恐らく助成金の問題だと思います。運営の仕方は見ていてどう感じましたか？

村田：霜田君が1人でお金集めてて、すごい大変だなって思ってた。どんどん額は減ってるだろうし、よく続けてるなって。NICAF は途中で終わっちゃったけど、NIPAF は続けてるだけでもすごいと思ってたよ。規模がちっちゃい分、続けられるっていうのはあるんだろうけど。

山岡：90年代、2000年代に彼が呼んだ海外のアーティストは、外国でもけっこう尊敬されているアーティストたちでしたね。印象に残った作品やアーティストはありますか？

村田：いやー、ほとんど覚えてない。やり方も1人10分とか20分とか、次々に出演者が変わっていくっていう方式が、こんなんでもいいんだろうかって。形式にはめてる見せ方っていうかね。

山岡：もったいないくらい素敵なアーティストが来てたんですけどね。ちゃんと日本の人たちに作品を紹介していたら、パフォーマンスアートの印象が、ボイスで終わらなかったんじゃないかと思います。

村田：入れ代わり立ち代わりだから、一つ一つの作品について深く考えることもないしね。「あー、おもしろい、あーつまんない」でどんどん回って、「はい、今日はお終い」みたいな感じで。あれはなんかあんまり.....

山岡：もうちょっと人数、絞った方がいいんじゃないかなって？

村田：うん。絞った方が、そうだね。

北山：80年代の中頃にボイスが来て盛り上がった、その流れを受けて90年代も展覧会とかイベントとかはあったんでしょうか？

山岡：どうですか？NIPAF はあったけど。

村田：うーん、80年代半ばの、流行語大賞で、あれでダメになったのかな。

山岡：80年代は、パフォーマンスという言葉が有名になったのにスターは出なくて、期待外れのムーブメントみたいな感じだったんでしょうか？

村田：パフォーマンスって基本的になんか、持たざる者の表現って思ってるんですよ。ようするにお金持っていない、技術を持ってない。絵を描く画材とか、踊る技術とかを持ってない人がなにか表現する時に、パフォーマンスってやり方になるんじゃないかって思ってた。

北山：はい。

村田：だから、バブルの頃にはそぐわないだろうなって思う。NIPAF でも、アーティストがアジア系の人が圧倒的に多いっていうのは、持たざる人たちの表現なんだと思うよ。欧米の人は少ないし、ヨーロッパでも東欧の人が多かった。持たざる者とか、あるいは抑圧された地域の人たちの表現というのは、バブル期の日本とは一番離れてるんじゃないかなって。

山岡：今までインタビューしてきた西島さん、谷川さんにしても、育ちがけっこう貧乏なんですよ。その中で自分ができる方法ってことで、パフォーマンスが出てくる。体一つで表現できるからでしょうか。体一つと鞆一つでパフォーマンスアーティストは旅に出てフェスティバルに参加しますが、鞆一つで行けることが特徴であり、魅力なんじゃないかな。

村田：そうだね、持たざる者の表現っていうのが、やっぱりパフォーマンスの特徴なんじゃないかな。そういうのが明らかになったのが、80年代のバブル期ではないかと、なんとなく思ってる。

山岡：80年代の最初ってまだ貧困の雰囲気があって、パフォーマンスおもしろいって、みんな飛びつくけど、リッチなものが世の中に出始めたら、なにもわざわざ暗い方に行きたくないですね。

北山：せっかく今、作品が売れる時期なのにパフォーマンスなんかやっても、ということでしょうか。イトー・タリーさんも、バブルの時期は作品がおもしろくないのよって言っていましたね。

山岡：80年代ないのよって、言ってたよね。

5. 美術史、美術シーンにおけるパフォーマンス

山岡：持たざる者にとってのアート/表現は美術史にとって、どんな立場、意味があると思いますか？

村田：美術史に限らず歴史は、モノとして残らないとなにも残らないから、そういう意味じゃ、パフォーマンスって残りにくいものですね。それに、歴史っていうのは分類する、歴史に限らないけど、科学って分類から始まるから、分類から外れるものはやっぱり残らない。そういう意味じゃ、美術史、歴史からはなかなか外れやすいだろうなって思うけど。

山岡：わたしは小さい民俗学系の博物館で働いていたんですが、民俗学って残りにくいできごとを残すことが目的でできた学問だと思うんです。たぶんそれに影響されてもいて、パフォーマンスアートも残らないけどできる限りの方法で、残そうと思ってます。

村田：うん。外れたもんっていうのは逆に歴史を作るっていうのがあると思いますよ。あるジャンルの中しか思考できない、ジャンルに納まってしまうものは、いずれ忘れられてしまうのがほとんどだけど、そこから外れて何か一つのことを確立すれば歴史に残ると思うし、むしろ注目されると思う。ただ、そこまでの強度を持ったパフォーマンス、表現があるのかっていうと、ちょっとどうなのかな。

山岡：ボイスは残ってますよね。でも彼はパフォーマンスだけじゃない。

村田：僕は、浜田さんのパフォーマンスも強度を持ってると思うんだけどね。浜田さんはボイスの影響をかなり受けてるけど。でも彼は記録を残してないからね。

山岡：広い意味でアートシーンにとって、パフォーマンスはどのような立場、意味があると思いますか？

村田：どうだろう。パフォーマンスがおもしろいのは、枠にはまった表現じゃないってことですね。なんでもできるっていう。四角い画面の中に表現するのでもなければ、決まった時間内に何かをするのでもない。枠組みがないところで表現できる。パフォーマンスが元気がなくなってくると、アートシーンそのものに活気がなくなってくる。トリックスターみたいに、アートシーンに刺激を与えるのがパフォーマンス。パフォーマンスがなくなると、アートシーンそのものが刺激されなくなって固定化されてしまう気はするよね。

山岡：はい。

村田：パフォーマンスって本当にいろんな流れがあって、音楽や舞踏の流れもあるし、日本の中でも霜田誠二の流れがあれば、浜田剛爾の流れもあったりして。浜田剛爾の流れっていうのはけっこうフルクススとか、ヨーゼフ・ボイスとか海外の流れを汲んでるので、僕は一番興味があった。パフォーマンスの歴史を考える上

で、浜田さんはけっこう重要だなって。

山岡：霜田さんが参加している海外のパフォーマンスのネットワークも、フルクサスの影響を受けた人たちがあちこちでフェスティバルをやって、お互いを呼び合うようなコミュニティがありました。荒井さん、西島さんのインタビューでも、仲間が大事だという話になっていて、コミュニティベースなのかな、と思ったのですが.....

村田：けっこう内輪で終わっちゃう場合も多いからね。NIPAF も何回か見てるうちに、霜田グループっていうのが、ちょっと鼻についてきた。

北山：霜田さんは、けっこうワークショップも好きだったというか、よくやっていましたよね。ボランティアや出演者集めの目的もあったと思うんですけど。浜田さんとか、他のパフォーマンスアーティストは、ワークショップはやってたのでしょうか？

村田：あんまりやってなかった。

山岡：浜田さん、青森に行かれてからは、発表されたりしてたんですか？

村田：そんなにしてないと思う。

北山：浜田さんの昔のインタビューでは、スペース作りが忙しそうな印象でしたよね。

村田：そうだったね。

山岡：村田さんは BankART のスクールの校長先生ですか？

村田：一応、そうですね。そんなにやってないけど(笑)。

山岡：今、一番おもしろくて、やってらっしゃるのは？

村田：お絵描き。絵に戻って来ちゃったって感じ。

山岡：そろそろ終わりにしようかと思います。時系列で80年代の大きな流れを伺えて、とても勉強になりました。ありがとうございました。

北山：ありがとうございました。